

アイヌの染色：衣服と民具 — 染材と媒染 —

佐藤 雅子

キーワード：アイヌ衣服，樹皮衣，草皮衣，染色，莫産

アイヌの人々が自製の衣服として、獣皮衣，魚皮衣，鳥皮衣を作り着用してきた事は記録と資料に残されている。その後の自製の衣服としては樹皮の韌皮繊維から作られる樹皮衣アットゥシ (attus<at 「オヒョウニレの木の皮」 tus<rus 「毛皮」¹⁾) とイラクサなどの草本の韌皮繊維で作られる草皮衣テタラベ (tetarape)²⁾，そして主に交易で入手した綿布から作る木綿衣がある。樹皮衣は主に北海道で，草皮衣はサハリン（樺太）で作られ着用されてきたものである。

樹皮衣，草皮衣の装飾の多くは綿布，綿糸が使用されている。衣服については特に樺太で製作された資料に赤色で装飾されたものの存在があり目を引く。赤色は象徴的に施されており，北海道アイヌが製作した資料には見られないものである。

北海道アイヌは綿布，綿糸入手以前にはオヒョウを赤色，黒色に染めて，ガマなどで作られる莫産 (citarpe, toma, kina, rusa など)³⁾に模様を表すときに用いた。

本論では，彩色に用いた資料と方法を探ることで，北海道アイヌとサハリンアイヌの彩色・染色に関する差異に迫ることを目的とする。

凡例

文献・引用の原文の〔 〕は筆者注。要約は適宜箇条書きとし，段落を／で表記した。

文献の引用・要約以外のアツシ，厚司など木本植物から作られた衣服を樹皮衣，イラクサなど草本植物から作られた衣服を草皮衣とした。

文献引用以外の樺太はサハリンという表記に統一した。

¹⁾ 中川 (1995:11) 『アイヌ語千歳方言辞典』，以下、『千歳方言辞典』とする。

²⁾ 知里 (1973:134)

³⁾ 服部四郎編 (1964,282) 『アイヌ語方言辞典』，岩波書店。以下『方言辞典』とする。

1. はじめに

アイヌは自製の衣服、民具の彩色はどのように行っていたのか、また、彩色のないものをどのように染めて、彩りとしたのかを探る上で、人々が色をどのように捉えていたかを知ること、染め、染色を調査する上で重要である。どのように「色」を表現するのかを述べておきたい。

田村（1974:24-36）は、色に関する呼称はクンネ kunne 〈黒い、暗い〉、レタラretar 〈白い〉、フレhure 〈赤い〉、シウニン siwnin 〈黄から青紫まで〉の「色名の基本的な語はこの4語だけである」とする。しかし他の色を認識していないのではなく、顕著な色を持つ物を引き合いに出しての表現や説明的に詳しく表現することもできるが、特にこういった正確さを望むのでないふつうの状況では、上の4基本色のいずれかに当てはめてしまうことが多いことも記している。『無彩色では黒から暗い灰色まで、有彩色でもこげ茶、濃紺、こい紫など、明度の低い色がkunne、無彩色では白から明るい灰色まで、有彩色でもうす黄、うすピンク、うす水色など、明度の高い色がretarになる。赤を中心に、ピンクからえび茶まで、赤紫からオレンジまでがhure、逆に緑を中心に淡緑色から濃緑色まで、黄から青紫までがsiwninのうちにはいる』としている。

『方言辞典』には、レタラretar 〈白い〉は北海道方言で、樺太方言には異なる色名のテタラtetara 〈白い〉がある。「染める」項目については和語の借用語とおぼしい somekar, isome と、〈黒く kunneka, ikunneka, ikurasnoka〉, 〈赤く hureka, ihureka〉, 〈緑に siwnika〉, 〈青く isiwninka〉 ほかがある。特に沙流方言では〈木の皮で sime, isime〉と染める材料が記録されている。千島方言では〈赤く染まる hurut'ki〉, 〈黒く染まる eko roku〉が記録されている。

また、後述する小田寒出身の U.N. 媼は、「赤色に染めることをフーレカ 〈hure-ka=赤く-する〉、染めるという言葉は忘れた」とする。「染める」ことは目指す色にすることで、特別な語はないものと考えられる。

2. 草木染工程とアイヌの染

現在の日本では植物染料などの天然染料による染色を「草木染」⁴と呼称している。福井（2004:69-70）は（柿本人麻呂の歌から）古来の染めは「摺り染め」で行われたことを知り実践している。特別な道具は使わず「杜若の花弁をひと握り準備し、白木綿のハンカチに摺り染めをした。花びらを布地に摺りつけて水洗いし、空気酸化させる。三回ほど重ねて摺りあわせると淡紫色に染まった」と結果

⁴ 山崎(和) (2003:3)「祖父が化学染料と区別するために1930年に命名した」とある。

を記している。そして染色と媒染の概略を「草木染めは摺り染めから始まり煮出した液で染色するようになると自然界のあらゆる植物の枝葉や樹皮、根、実を用いるようになった。（中略）染め方は花卉や実、樹皮と根等の煮染めと浸け染めなど、各植物に適した方法がとられ、色素の発色と定着には、媒染剤を使用する。酢や木灰、錆釘（鉄分）等が用いられた」と論考している。

人々は目指す色を得るために身近にある材料と方法を用いて染めを行い発展させてきた。染色と媒染剤について述べ、アイヌの人々が身近にある材料を用いどのような方法で目指す色を得たのか、その染色の方法を求めることとする。

2. 1. 草木染の分類：前田（1977:141-146）（アイヌの染色を想定した方法に下線を付した）

1 類：草摺り法 生地に直接摺りつける

2 類：発酵法 発酵により色素を還元し、水溶性とし、生地に吸着させた後、空气中または水中で酸化して、不溶性の色素を生地に固着させる方法。藍染めだけに使用する。

3 類：アルカリ抽出酸発色法 灰汁のアルカリによって植物から色素を抽出し、生地に吸着させた後、酸で発色させる方法。紅花染めだけに使用する。

4 類：一般的染法

①直接染法＝直接に生地を浸して染める

②酸性浴染法＝染液を酸性にして染める

③媒染染法＝媒染剤を使用して染める

2. 2. 媒染方法について：草木染とアイヌの染め

染める素材に色を定着させる働きをするのが媒染の役割である。山崎（1981:130）は媒染による染法は酸、鉄、錫、銅、クロム、蛋白、タンニンそして酸化剤を利用する8種類を挙げる。アイヌは入手しやすく自然環境中に存在する①鉄分の含まれる土壌、沼などに浸すことで鉄媒染を、②植物の成分の多い池沼などに浸すことでタンニン媒染を、③空気中の酸素、水中の酸素、灰汁などのアルカリ媒染も酸化剤と言え、この3種の方法で求める色を得たと考えられる。福井（上掲）の実践した染めは前田（上掲）の「草摺り法」に相当し、「水分と空気による酸化」という媒染を行ったことになる。

3. 染色に使用する材料：残された記録からの情報（下線は全て筆者による）

彩色方法について1868（明治元）年以前の史料を含めて紹介した河野（1971:30-41,初出1931）の

論考は、知里（1976）、齋藤（1992）その他が参照し、染める工程の代表的な論考となっているが、疑問点も指摘されている。齋藤（1992:141）は「チクイラはイワツツジで可食の赤い実がなるが、チライキナはサハリンでエゾフユノハナワラビ（シダ植物）、本道〔北海道〕でフクジュソウをさし、実で染めるというのは少し疑問が残る」とした。また、染色専門誌⁵にはシエイキナへの疑問から「エゾタイセイ」と「アイヌの染色」など北海道の染織の特集が組まれた。また染色専門の立場から上村（1979:389-401, 初出 1943）も論考している。その論考を含め、今一度見直していきたい。

あらためて日本が近代化に向かう契機となる明治初年以前の一次資料に近いと考えられる文字資料と、その後の文字資料から色を染める材料と工程を見ていくこととする。

3. 1. 1868 年（明治元年）以前の史料

史料は筆写により、必要とされる人々に供されたと想定される。原本（一次史料）の多くは所在不明とされ、ここで紹介するのは二次史料以降のものである。なお、判明する限り調査年を記した。

3. 1. 1. 『夷諺俗話』、串原（a）巻の三 28 枚目、b)76 コマ）1792 年の記録

蝦夷紫の事 蝦夷人の着するアツシに薄紫に染めたるあり 是は何を以て染めたるものぞと尋し所 ソウヤ領の内にチエトマエといふ所にフラシノといふものの實なり フラシノは和名濱松と云ものなり 是を口中にてかみくつしアツシを染めたるなりといへり 色合至て見事にて、やはり江戸紫のとし チエトマエに沢山あり

知里（1976:100）は「フラシノ hurasno は樺太でいう kurasno からきたものであり、漿果をさす⁶」とする。そして宮部・三宅（1915:433）はクラシノはガンコウランとする。

3. 1. 2. 「協和私役」、窪田（1969:228）、1856 年の記録

（モロランからホロベツに向かうため、山路に入る）山中路嶮なり。柏木甚多し。皆大木なり。夷人皮を剥ぎ染汁と為す。

3. 1. 3. 「天塩日誌」、松浦（1977:511-512, a)16-17 コマ, b)16-17）、1860 年の記録

⁵ 染色と生活社編（1981）、『月刊染色 α(5)』、染色と生活社

⁶ 『知里真志保著作集 別巻Ⅰ 分類アイヌ語辞典 植物編・動物編』。以下『植物編』とする。

「アットウシの染め方 扱爰にて胡女が種々の色糸にてアツシを織居たりしが、其染方を聞に赤く染る時はラルマニ（木の名）にて煮ると。（後略）」ラルマニはイチイ、松前ではオンコという。この染めを（オンコ染め）という。「鼠には沼に浸し置、黄茶には赤楊〔あかやなぎ〕の皮もて煮、紫にはイツキマイマイ岩 樅（（左に）ガンカウラン）の実。藍にはシエイキナとて（中略）是にて染むると。」そしてシエイキナは藍の葉の如く尖り、秋末に小白花⁷を開くと記述、大青（ハマタイセイ、エゾタイセイ）ではないかとする。

3. 1. 4. 「再航蝦夷日誌」、松浦（1971:240）、（1991:466）、1846年の記録

又此地にてヨタルベ〔テタラベ〕といへる布を出す是は本邦にて云るカラムシなり（中略）是ニは黒また赤草の類等ノ色糸を入る也。その染め草も昔此地より出るものにし而、あえてむつかしきものにもあらざるよし也。其の染方は口に而其草の実、又は草の葉等を嚙たゞらしそぐとも其糸を口に而かみて居る也。唇より其赤き汁の流れ居るさま（中略）此染艸は二十年前三旦人より習ひえたるごとく而、カラフト島にも昔しより無ししことなりと云り

「喝囉虎土雜記」には名前が異なる表記（1971 版はキライヲマ、1999 版キライチマ）となっている。

チクイラ 夏は青く秋に至りて赤し。蝦夷人は是を以て染め物とする也。又此を喰う二よろしキライチマ（キライヲマ） 此実を油にて煮、水獣の皮及糸を染るに用ゆるなり

再航蝦夷日誌（1999:466）編者の秋葉によると、「キライヲマ（角持つもの）。キライニ（角ある木）なら桧（ずみの木）」としている。

「喝囉虎土雜記」は『瓦刺弗吐島雜記』を指すと思われる。

3. 1. 4. 1. 『瓦刺弗吐島雜記』、高橋⁸（1790:7 コマ目）（絵図と共に記載）

又サントタン人ニ習フテ糸及水獣ノ毛ヲ染ル草アリ 夷呼キライヲマ

チクイラ 夏青ク至秋赤ク蝦夷食之 是ハ柴木ナリ 此二品之實ノ油ニテ煎水獣ノ毛ヲ染ルに洗ヘトモ落ス

⁷ a), b), c) 共に漢字は崩し字であるが「白」と確認出来る。伏見沖敬編（1977:709）『角川書道辞典』、角川書店

⁸ 著者名及び成立は北海道大学北方資料データベースによる

<https://www2.lib.hokudai.ac.jp/cgi-bin/hoppodb/record.cgi?id=0A024980010000000>

3. 1. 4. 2. 前田・前田 (1865) 瓦剌弗吐島雜記の記述：『蝦夷志料』巻第 157 (ページ数未記載,31,35 コマ目) 記載のキライヲマとチクイラ (絵図不記載)

(草の項目) (附子の項目に続けて書名とともに記載) 又サンタン人ニ習フテ糸及水獸ノ毛ヲ染ル草アリ夷呼キライヲマ

(木の項目) チクイラ 夏青ク秋ニ至リテ赤シ蝦夷食之 是ハ柴木ナリ 此木又キライヲマ。
ノ實ヲ油ニテ煎水獸ノ毛ヲ染ルに洗ヘトモ落ス

3. 1. 5. 「北蝦夷餘誌」松浦 (1977:568) 1860 年の記録

(シリマオカにて矢立に入れる墨が薄くなり、その対処をしていると) 老人一枚の鍋を持来りて是を伏せ、その下にて樺皮を焼き、其油煙を鳥の羽にて拂ひ、矢立に入れ呉れたりけるが、少しも墨に異なること無ししかば余も厚く謝せしが、我ら矢を染る時は皆此墨二染るとて、赤と黒とにて染し矢を見せしが、其赤きを問しかばシュマヘーと答えぬ。依て余それを乞ふに、赤き岩石を一片呉れたり。実に不自由なれば又それなり事済むかと感じ侍りぬ。

図録等からは矢に赤い彩色がされていることの確認は難しいが、中部千島のシムシル島で採集された矢の柄木質部が赤い⁹史料が残されているが彩色されたものか赤い木肌の材かは不明である。

3. 1. 6. 「東蝦夷日誌」松浦 (1984:276) 1863-1865 年の記録

(長節沼を過ぎて山岸、トンケシ (小川) 沼端と云儀) この邊り^{イチキマイマイ}岩 樅 (ガンコウラン) 多く、其の實を土人は喰し、又此實を以て楡皮を染むるなり。

3. 2. 1868 年以後の史料

3. 2. 1. パチェラー、ジョン (1925:65-66)

(楡の樹皮で作った布は黒くするために) 樺 [カシワ] の樹皮より採った煎薬を煎立てたものに浸し鐵分を多量に含んだ谷地に、一週間くらい浸けておく。赤味がかった黒色になる。クネネチップ (黒い品物) という。

⁹ 市立函館博物館デジタルアーカイブ <https://hakohaku-archives.c.fun.ac.jp/records/701259>
No.701259, 701261, 701262 他

3. 2. 2. 宮部・三宅 (1907,11-13,71-74), 1906 年 7 月から 10 月調査

樹木の用途の内、樹皮について「染色材ニハやまはんのき、みやまはんのき、からふとなら、つたうし、きはだ、からふとずみ、ゑぞのうはみづぐら、さくら、はまなすヲ用ユ」と記し、染料植物として「カラフトオンコ「アイヌ」は心材を「アツシ」ノ染料ニ供ス／ヤマハンノキ、ケヤマハンノキ 樹皮ハ漁網ヲ染ムルニ供スヘク北海道「アイヌ」ハ「アツシ」ヲ染ムルニ用ユ／ミヤマハンノキ 樹皮果実共に染料ト為スヘシ／エゾタイセイ 稀に海邊ニ生ス葉ヲ磨碎シ発酵セシメテ塊ト為シ院青¹⁰ヲ染ムヘシ／ハマナス (薔薇科) 根ハ鳶色〔赤黒い茶褐色〕ヲ染ムルニ用ユ／エゾノウワミズザクラ 根ハ染料ニ用ユヘシ／ツタウルシ 葉ヲ染料ニ供ス／キハダ、シコロ 土人皮ヲ以テ黄色ノ染料トス／アカネムグラ 根ヲ黄色ノ染料ニ供ス」と記し、別項目に記すが重複がある。

3. 2. 3. 旧土人に関する調査 (1922 北海道庁 (河野 (上掲) による)

黒褐色 カシワ又は赤楊の皮に熱湯を注ぎ其の液汁に織物を浸し、後微温湯に鉄鍋を入れて作りたる液に移し、約 1 週間を経過するを要す。

3. 2. 4. 「民族調査報告書－資料編Ⅱ－」(1973,8) T.H.翁 (樺太小田寒出身 1906 年生まれ, 1921 年白浜に集団移住), 1971,1972 年聞き取り

ゴザはペヘサムシ 〈pex→pet-sam-us-i=川のーそばにー群生するーもの=カサスゲ〉で編む。黒色に染めるにはコケノミのフレヘ 〈hure-x→p=赤いーもの=イチゴなど赤い実の総称〉を干しておいて使うときに水かお湯で戻し、すっかり漬すと黒い色水が出てくる。これにひたして染める。緑色もニエリ 〈nieri=クロウスゴ〉の実で染める。実は 6～7 月頃になる。大正末期には墨や赤インクで染色する人達がいた。この色は人工のものだからどうしても年月とともに薄くなっていくので、必ず酢を少量入れて染める。そうするとあまり色あせることがない。

3. 2. 5. 「民族調査報告書－資料編Ⅱ－」(1973,33-34) U.N.媼 (樺太小田寒出身 1901 年生まれ, 18 才のとき内渚に嫁ぎ, 1921 年白浜に集団移住), 1970,1971 年聞き取り

¹⁰ インディゴブルーを指すか。

赤い色をフーレ〈hure=赤〉といい、赤色に染めることをフーレカ〈hure-ka=赤く-する〉という。染めるという言葉は忘れた。糸などを染めるにはイフレカニ〈i-hure-ka-ni=それを-赤く-する-木=赤の染色に用いる木=ハンノキ〉のカハ〈ka-x→kap=皮〉をはいで、かげ干しにして保存しておき、染色したいときに木の皮を鍋でたいて赤い汁をだし、湯の熱いうちに染めたいものを鍋に入れ、少し煮立ててから鍋ごと下しておく。色よく染めるには湯が熱い方がいい、ぬるくなって入れてもうまく染まらず、淡い色に染まったり、むらができる。だから、「イフレカニカハアニキアヌワ=ihurekani-kax→kap-ani-ki-anu→an-nu-wa=ハンノキの-皮-で(染め)る(ことを)-私たち-もて(ばいい)-よ=ハンノキの皮ですればいいんだよ」とか「イフレカニカハアニキアヌワ=同上」という。／黒い色をクラシノ〈kur-as-no=影が-群生する-全く=かげだらけの=真っ黒=黒〉といい、オコマ〈okoma=?〉の木で染める。それで「クラシノカアンカラヤヌワ=kurasno-ka-an-kar-yanuwa→annuwa=黒く-染める(ことを)-私たちが-すれ(ば)いいよ。」という。／白をテタラ〈tetar→retar=白〉、紫をアサギ〈日本語 浅黄〉青や緑は忘れた。

3. 2. 6. 民族調査報告書-資料編Ⅲ-(1975,12)H.F.媼(網走市シュマカ出身, 1894 年生まれ, 17 才から美幌で生活), 1970,1971 年聞き取り

(熊送り用ござ) 熊送りをイオマンテ〈i-oman-te=それ(動物の霊)を-行か-せる=熊送り〉といい、この儀式に用いられるござは特別に作っており、特異なヌエ〈nue=模様をつける〉が編み込んである。大きさはキムンカムイ〈kim-un-kamuy=山に-住んでいる-神=熊〉より一回り大きいものである。このござの名称はわからない。

3. 2. 7. 満岡(2003.:39-40,初出 1924)

アットウシ、キナ(kina 敷物)の模様を出す染料を持たない。ただ、わずかに赤と黒の二種を作る。黒は柏の皮より渋を取り、所要の材料を浸し、その上野池水の中に浸す。薄黒色は渋に浸さず最初から野池水の中に浸す。赤色はハンノキの皮に熱湯を注ぎ、しばらくしてこれを揉む。その汁はそのまま赤の染料となる。他地方では植物から取った。この他に 2. 3 の染料を用いる物もあるらしいが、白老では以上二種の以外使用していない。

3. 2. 8. 上村(1979:397-398,初出 1943)による Y 氏(1882 年生まれ, 浜増毛出身, 老母が常に

染色をしていた) への 1933 年聞き取りの概要

小さい時から染色を見てみたが、アイヌの染色には 3 種類ある。即ち赤と黒と黄とがそれぞれある。まづ赤を染めるにはケネ (はんの木) の皮を採つてこれを粉にして袋に入れ、水に入れて煮出す。袋に入れるのは染液の中に染料が混じて来ないやうにするためである。この煎汁の中にオヒョウやシナの繊維を入れて染める。染料以外には何も使用しない。媒染剤は用ひない。次に黒を染めるにはクルミの樹皮を使用する。染方は前と同様であるが、この場合は沼地に入れて発色させるか、もしくは「かなくそ」の水の中に入れて発色させる。黄色を染めるにはシコロ (黄蘗) の皮を使ふ。黄色はアツシには用ひない。キナの模様の中心をなす大切なところへ、黄染の色を用ひる。尤も黄染を使つたキナは普通の敷物などに用ひるものではない。チセ・コテシユ・キナ (家につけるキナ)、イナウサン・コテシユ・キナ (イナウの側につけるキナ?) 及びカムイ・ソコロ・キナ (神に敷くキナ) にのみ使用する。この種のキナは古くなると山へ送る。もし他へやつて粗末にされると勿体ないからである。そして近所の人や親戚にも貸さない。これももし粗末にでもされると大変だと云ふのである。／アイヌは黄色を尊い色としてゐる。黄蘗の木も神事用の木としてゐる。熊祭りなどに用ひる木は黄蘗である。しかし、赤色をそう云ふ意味に用ひることはない。ただ、何の意味か分からんが、子供は髪にケネ染のものをつける。女も亦赤いものを用ひる。／入墨に用ひる墨はラウラウ (蛇のたいまつ) の根を焼いて墨につくつたものである。これを使用すると傷もなほり、墨も消えぬし、また、噴き出さぬ特点がある。／アカダモ (楡) の皮の繊維はそのまゝ糸にして織つて着物にする。オヒョウのようにさらさない。／なほ、赤土をもつて舟のしるしを付ける習慣は石狩と浜増毛との間のオヒョウと云ふ処で見たことがある。しかし、舟を赤や黄で塗ることは知らない。

3. 2. 9. 西鶴 (1974:61-62,69-72,118,初出 1942)

刺繍に用いる色糸には「雁紅蘭 (クラシノ) の実で染めた黒糸、フレップで染めた濃い紅色、榛 (ハンノキ) の皮の汁で染めた薄紅の糸を用ひた」

3. 2. 10. 渡辺 (1951:80) 日本民族学協会調査は 1951 夏

(オヒョウの) 黒染には tun-ni カシワ と neshko-ni クルミの樹皮 の煎汁に 1 日ぐらい浸し次に湿地泥土中に 2—3 日間放置、赤染 kene-ni-kap ハンノキ樹皮 を用い同上処理、または淡赤褐色 ruhure に染めるには灰汁で数時間煮沸し取出して天日で乾燥し、これを束にして保存して随時

糸に作られる。

3. 2. 1 1. 知里 (1976:84,99)

(オニグルミ nesko) この樹皮わ、また染料にも用いた。例えば、蓼麻や榆皮の繊維を黒く染めるにわ、この樹皮を煎じて得た黒色の汁に二、三日浸した後、鉄分の多い沼の水、それを「イクンネレ・ペチリ」i (物を) kunne-re (黒く・する) pechir (水) とゆうが、その中に漬けておく(幌別)。

(ガンコオラン『フラシノ』) 果実わ、それを食べると病気にかからぬと云って、多量に採取して来て食べた(幌別)。また、この果実わ、ひろく染料(紫・黒)に用いた。(中略) 樺太でも、厚司の原料であるイラクサの繊維を染めるのに、この果実といっしょに(口中に含んで嚙んだ(白浦)。また、この果実の皮を水に漬けておいて、その浸出液で厚司の糸を染めた(真岡)。

3. 2. 1 2. 更科 (1968:85-86)

^{コタン}部落には色彩についての語彙はきわめて少ない。黒というクンネは暗いことでもあり、紫や紺色でもある。紫のあやめを黒い^{クンエアバツボ}花と呼ぶのである。明るい白や黄色は全てレタルであり、赤は紅でも茶色でもフレだった。昔の生活にはそんなに細かく色彩をわける必要がなかったのである。／黒い色を出すには^{グルミ}胡桃の樹皮や実の皮の煎汁で煮て、青粘土の中に埋めるのが最も普通の方法で、釧路や十勝では^{ハルニレ}柏の真皮の煎汁で煮たのを、鉄分のある湿地の泥に埋めるのである。この他^{アオダモ}あおだもの煎汁(釧路白糠)。^{キヤマウコギ}きやまうこぎの実(静内農屋)。鉄分のある湿地に入る(新冠滑若^{ナメワツカ}, 十勝音更^{オトフケ})。などがある。／赤はほとんど^{ハルニレ}はんのきの皮の煎汁で染める。はんのきをケネというのは^{ケムニ}血の木で、立木の皮に傷をつけるとたちまち赤くなるので名づけられ、産後の補血剤に使うほどであった。日高では^{ハルニレ}柏の真皮の煎汁で染めるところもあり、^{ハルニレ}春榆の真皮の赤茶色をそのまま使用する場合も多い。／黄色は例外なく^{キハダ}きはだの真皮の煎汁で染めるので、黄色のことをシケルペペウシ(きはだの液がついている)ともいう。

3. 2. 1 3. 更科・更科 (1976:84-85,91) 『コタン生物記 I 樹木・雑草編』

イチイ・オンコ：この木の真皮や木質の芯の部分は、ハンノキの皮と同じように織物にする繊維を赤く染めるのに用いたが、これで染めた色の方がハンノキのものよりも温かみのある、お

となしい色調を持っている。

ケヤマハンノキ：この木の皮を煎じて作った赤い浸出液は染料として、織物にするオヒョウの皮の繊維をひたして赤褐色に染めるのに用いた。赤く染める染料としてはイチイの木質の芯部とこの木の皮以外にはなかった。

3. 2. 1 4. 山本 (1970:250-251)

(莫蔭はエゾスゲの葉 (pexcamsi), フトキの茎 (katunki, toj-kina) を用いて莫蔭を織る。織る際の模様は) オヒョウ楡の内樹皮を織り交ぜて作る。着色の方法は次のようである。黒色には^{ガンコウラン}岸高蘭の実 (クラシノ kurasno) をこの樹皮の繊維と共に嚙んで染める。赤色は榛の木の皮と共に煮て染め付ける。榛の木をイフレカニ(i-hure-ka-ni 「ものを・赤く・する・木」) といい樹皮を水と共に煮ると真赤な液汁となる。また、苔桃の実 (ツレヘ turex) 潰してその液汁で赤色に染め付けもした。

3. 2. 1 5. 知里・山本 (1979:76-77)

繊維用のものには蓴麻 (ハイ haj) があり、内皮を撚って樺太特有の厚司〔タテラペ tetarape〕を作り、その他に結び糸、釣り糸、紐、綱、網等も作られる。

織り莫蔭用の野草はテンキグサ (ライムン rajmun), ヨシ (スッキ suxki), カサスゲ (ペッサムシ pexcamusi) 等がその材料となる。蓴麻の糸で織り上げる。特に室内の壁を飾る模様入りの美しい莫蔭は主にオヒョウニレの樹皮を多く用いて種々の色に染めてアイヌ独特の美しい模様を描き出している。莫蔭の名称はソッカラ soxkara または、ルサ rusa というが、樹皮入りのものはアトゥンペ at-un-pe 「樹皮入りのーもの」、アトゥンルサ at-un-rusa 「樹皮入りのー莫蔭」と呼ぶ。樹皮を染めるには^{ガンコウラン}岸高蘭 (クラシノ kurasno), フレップ (トゥレヘ turex) の実, 榛の木 (イフレカニ ihureka-ni) の樹皮を煎じたものである。

『植物編:164-165』には「樺太でわ木の実を ni-turex (<ni-turep) またわ単に turex (<turep), と云っている」と記している。

3. 2. 1 6. 知里・山本 (同上:40)

パークィ〔ゴマフアザラシ〕, オンネカムイ〔ファイリアザラシ〕の生まれたばかりの幼獣をコノシペ (<kon-us-pe 「綿毛の・ついている・もの」) という。(中略) コノシペは真白い柔らかい

毛皮に包まれている。この毛をアイヌは珍重する。毛を小刀で採り、ほぐすと一種の綿毛のようなものが採れる。これをコンコニ konkon(i)という。このコンコニを糸に撚り、苔桃の実などで赤く染めて海豹衣や魚皮衣（カヤ kaja）、厚司の縫い目や、刺繍の飾りとして縫い付ける。

3. 2. 17. 大貫 (2021:70-74,77)

ハルニレの生育していない地では、「若い男性でもイラクサ製の衣服を着ていた」とする。

オヒョウの繊維はイラクサ製の糸ほど強くないため、機織りの際にイラクサ製の糸は通常、横糸として使用され、オヒョウ製の糸は縦糸として使用される。オヒョウの樹皮を主原料とする衣服は、若い男女が着用するが、年長者でも日常着にしている／性別と地位の違いを示すのは衣服の素材である。例えば、イラクサ製繊維の衣服は男性の長者だけが着用する。また、装飾の文様に使われているデザインと色の豊富さも、これら性別と地位の違いを示すものである。したがって、男性の長老の衣服は、赤をふんだんに使用した数多くの文様で装飾されたものでなければならない。赤色（色相で濃い赤やほとんど茶色のものから明るい赤までの幅を持つ）は、ハンノキの樹皮を入れて赤くなった水に材料を浸すことによって染められる。男性の長老の衣服とは対照的に、女性の服は文様が少なく、赤は見られない。／（莫蔭の模様は）着色されたオヒョウの内皮の紐で作られている。（中略）儀式の際に最も重要な色である赤は頻繁に使用される。そのために前述の如く、オヒョウの繊維はハンノキの樹皮の入った水に浸けて染色される。鮮やかな赤に染めるためにアイヌの女性は、エノノカ enonoka と呼ばれるコケモノの実をつぶした液汁を使用する。黒（色相で言う灰色から濃い青までの範囲と黒）は砕いたクラシノ kurasno ガンコウランの実をつぶした液汁から得られる。黄色はキハダの一番外側の樹皮から作られ、赤い染料を準備するときと同様に、水が黄色くなるまで浸しておく。

オヒョウと共にイラクサを縦に織り込んで縞柄にした資料は有るが、横糸にイラクサ、縦糸にオヒョウを用いた資料は、図録にも見られない。資料の説明不足の可能性はあるが、織り上がりの横糸は目立ちにくく、上品と評されるイラクサを横糸にするのは考えにくい。

3. 2. 18. 山川 燭 (1989:89-90) (1905 年生まれ, 1975 年聞き取り,)

（ガマの葉で作るキナ（ゴザ）の模様はどうやって作るのですか）模様はオヒョウの木の皮を、潤かした物を薄くして、半分黒く染めるんです。昔は黒く染めるには、クルミの皮を煎じた中に入れました。赤く染める物は、ハンノキのくず皮を炊いて、その中に入れて染めたんです。

(その他の色は。例えば黄色とか。) いいえ、ないです。(そうしますと、赤と黒だけですか。)

ええ、赤と黒だけでした。

4. 考察

河野(上掲)が直接間接に調査した「アイヌの織物染色法」は他の文献資料と共に表1にまとめ資料とした。樹木草花の名は文献資料のままとした。

樹木は樹皮、内皮、真皮などを使用し、熱を加える、灰汁を用いる、鉄分のある沼に浸けることを繰り返すなどして、目指す色にした。赤色を得るためには、ハンノキ、イチイ(オンコ)の樹皮などが用いられ、まれにカシワの樹皮が含まれる。黒色を得るためには、カシワ、クルミ、カツラ、アオダモ、アカヤナギなどの樹皮を用いた。黄色は黄蘗の樹皮に代表される。

果実も染材とした。果実のなる季節には噛むなどして赤色を得、保存した果実は水などに浸けて黒色を得たものと思われる。厚岸では花を利用した染めも行われ、ハマナシ(ハマナス)は赤色、米百合(アイヌ名ハル、クロユリカ)で黒色を得た。また樹皮で鮮明な赤色を得るために加えた果実は保存したものでなく、生食できる果実を加えたものと考えられる。

染材としてサハリンでは果実が多用されているのが顕著である。北海道では明治以降の調査で果実が利用された記録はケヤマウコギの実のみである。樹木の利用は植生が関係するが、筆者は植生まで踏み込めていない。

媒染の方法は、鉄分や植物の成分の多く含まれる土壌・沼などに浸し、灰汁を利用し、空気・水などに晒すことで求める色を得た。

天然染料(草木染)は動物性繊維にはよく染まり、植物性繊維には染まりにくい性質がある。中でも木綿は染まりにくく麻¹¹にはよく染まる¹²という。麻に似るイラクサに比し、樹皮のオヒョウは染め難いものであったと思われる。

本論で名前をあげた染め材と媒染剤との関係を、染色家の論から求め表2にまとめ参考とした。

《『天塩日誌』に見るシエイキナ》

松浦は「シエイキナは大青ではないか」と記した。上村(1979:391,初出1943)は「調査の結果を簡単に記せば、アイヌの「シエイキナ」という藍草は不明である」こと、そしてシエイキナは山藍で

¹¹ 数種あるが木綿との対比のため、麻に統一した。

¹² 山崎(和)(2003:9,15)「藍の生葉染に挑戦」、『NHK 趣味悠々 自然の色を楽しむやさしい草木染』、日本出版放送協会

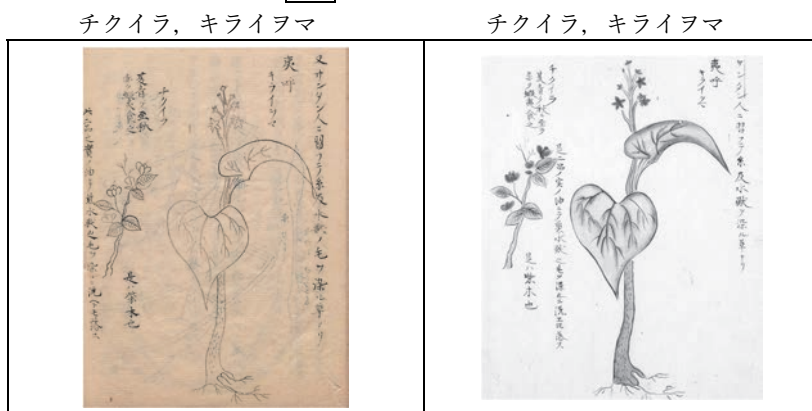
はないこと、アイヌの部落のあるところには必ず大青があり、アイヌが藍染に使った草はおそらく野生の大青であろうと推定している。日本の大青はハマタイセイ（別名エゾタイセイ）の1種であり、花は小さく黄色、角果¹³は熟すと黒褐色となる。古い時代に染色用としてヨーロッパ方面から移入されたものの名残ではないかとされる¹⁴。日本では藍が青色染料として使用されてきたが、藍は発酵法を以て染料となる。また、発酵法によらない生葉染めの場合は動物由来（絹など）の素材にしか染められず、植物素材は染められない¹⁵こと、花色も異なることから、アイヌの人々が藍色を染めたかは不明ながら、「シエイキナ」は大青ではないことは確かなことと思われる。

『再航蝦夷日誌』に見るチクイラ、チライオマ（キライフマ）

『植物編:258,55』によると、チクイラ cikuyra は ecicara の別名でイワツツジとあり、「柴木也」の表現と一致する。しかし、イワツツジは地下茎で伸び、葉だけ地上部に出ている多年草のような落葉小低木（茎の高さ 10 cm 程度）であることから、「柴木」とすることには疑問が残る。『蝦夷志料』には「この2種が共に染料となる」の記載はない。

図2. 「瓦刺弗吐島雑記」

図3. 唐太雑記（瓦刺弗吐島雑記



編者の秋葉(1999)は、「キライフマ（角持つもの）。キライニ（角ある木）なら桷（ずみの木）」と記している。ズミは落葉小高木または低木、短枝はしばしば刺状となる。名は「〈染み〉」で、樹皮が黄色染料として用いられたためという¹⁶」であり、柴木の表現とも一致するが、「短枝がしばしば刺状とな

¹³ アブラナ科に見られる果実を指す。

¹⁴ 大橋他編（2017:64）『改訂新版 日本の野生植物4』，平凡社

¹⁵ 山崎（和）（上掲 35）

¹⁶ 大橋他編（2016）『改訂新版 日本の生植物3』，平凡社

る」木は他にもあり、特定は難しい。次の図を見るとチクイラとキライヲマは写本を作る段階で名前と図は入れ替わった可能性がある。齋藤（1992:141）が疑問とした「チライオマで染める」は、「キライヲマで染める」ことの誤りであり、植物名が違っていることからこの疑問が成立しないこととなる。

《フレップ、ガンコウラン、岩縦、イワツツジ、コケモモ、コケの実、ハマナス》

イワツツジ、コケモモ、ハマナスは赤い可食の実がなり、ガンコウランは黒い可食の実がなる。

河野（上掲:39）の調査による多蘭泊の黒色染めについて、「黒色 フレップの皮（コケの実）を煎じて用ふ（フレップーコケモモ、コケの実ーガンコウラン）」とあり、「コケの実」は何を指しているのか、この記述が筆者の混迷の源であった。

松浦は岩縦にイツキマイマイとルビをふり、左側にガンコウランと記す。岩縦にはツガザクラの別名があり、本州では高山の岩場などで見られる。ツガザクラとガンコウランはとてもよく似ている。ガンコウラン¹⁷は小型で匍匐する常緑小低木、花は赤紫、可食の果実は黒い球形である。ツガザクラ¹⁸は種類により花色は種々ある。実がなるかどうかは確認出来ていないが、ツガザクラは高さも同程度で共に葉の細さ形状も同様であり、混同し易いともいえる。「コケの実で染める」は別に一例あり、小田寒出身の T.H.翁は「黒色に染めるにはコケノミのフレへ〈hure-x→p=赤いーもの=イチゴなど赤い実の総称〉を干して」がある。コケノミは干した果実を用いて黒色を得る。

『樺太植物誌』¹⁹にみる「ガンコウランとコケモモ」

・「ガンコウラン」(p433):「がんこうらん。こけのみ。エンチキマイマイ。イチキマイマイ（北海道アイヌ名）。クラシノ。クラシノニ（樺太アイヌ名）。

・「コケモモ」(p299):「こけもも。はまなし〔ハマナス〕。フレップ（方言）。エヌヌカニ。エノノカ（樺太アイヌ名）としている。

ハマナスとコケモモは共に赤い実がなることが共通する。「コケの実」とあるのは「コケノミ」で「ガンコウランの別名」であることは東北森林管理局のホームページで判明した²⁰。河野（上掲）の

¹⁷ 岡山理科大学 生物地球学部 生物地球学科 <http://had0.big.ous.ac.jp/index.html>

¹⁸ 稚内市北方植物園 <https://wakkanaihoppo.jimdofree.com/花事典/ツツジ科/>

¹⁹ 宮部金吾・三宅勉（1915）『樺太植物誌』、樺太廳

²⁰ 林野庁東北森林管理局

<https://www.rinya.maff.go.jp/tohoku/sidou/jumoku/shubetu/gankouran.html>

多蘭泊の黒色染めは「コケノミ（別名ガンコウラン）を煎じて用ふ」ということになる。しかし、ガンコウランの実は黒色であり、T.H.翁の「コケノミのフレへ〈hure-x→p=赤いーもの=イチゴなど赤い実の総称〉」とは異なり、他の種を指していると考えられる。

《「アサギ」,「紫」について》

文献や聞き取りの中で繰り返し出てくるのが「アサギ」である。

松前（前掲:182）のレタルペ〔テタラペ〕図に注目した。「レタルペ（方俗云イタルへ）カラフト島ノ産ナリ。アツシニクラブレバ上品タリ。此物火ニツヨク〔、〕アツシ、水ニツヨシ。蝦夷コレヲチタルベトモ云、イタルヘト云ハ方俗ノ詞ナリ」。テタラペ図の説明には「コノ紫色ノトコロラシヤノミノ如キ毛アルモノニテトヂ付タリ。是ホキリ²¹ノ白毛ヲ染タルヲ用ユ。獣部ニ見エタリ。地白、〔模様部に〕浅ギ、赤、白、浅葱。〔裾に〕ネズミ。〔下段に〕徳廣、此紫色云、イヅレヲ指ニヤ、源本不^レ慥。袖トモニ六幅ナリ。織糸何物タルコトヲ知ルベカラズ。アカキ所緋又緋カヘキノ如キモノ也。青白モ又同ジ。」に着目した。

本稿で取り上げた「アサギ」は次の3点である。

- ① U.N.媼の「紫をアサギ〈日本語 浅黄〉〔という〕」
- ② 山本多助氏の語彙を紹介した田村（将）（2009:147）「（日本語の）アサギは（アイヌ語の）マウッカン ポウス？」
- ③ 松前（上掲）に見る「浅ギ、浅葱と、紫色は何を指すのか判らない」

日本人は「アサギ=浅葱、薄い藍色」を連想する。そのためか、①U.N.媼の聞き取りをした藤村久和氏は日本語の色名として註を加えていない。②山本多助氏の語彙を紹介した田村（将）（上掲）も赤色、白色、黒色と同列にアサギを日本語として記している。③松前（前掲）はアサギを日本語の色と認識した事がうかがわれ、「紫色は何を指すのか判らない」に繋がったと思われる。アイヌ語に「アサギ」の語があれば「asangi, asanki」になる旨を中川裕先生からご教示いただいた。バチラー（1938:53）²²に〈asangi 青キ、緑〉とある。青、緑はシウニン siwnin〈黄から青紫まで〉とも表記される。

本稿で取り上げた文献の中で「紫」が出てくるのは串原の『夷諺俗話』の「フラシノ（和名濱松）で染める」と、松浦の『天塩日誌』の「岩樅（ガンコウランの実）で染める」である。

²¹ ホキリ：古文献に載る北海道に於けるアザラシの別名。知里（1976:164）『知里真志保著作集 別巻Ⅰ 分類アイヌ語辞典 植物編・動物編』による。

²² バチラー、ジョン（1938:53）『アイヌ・英・和辞典』第4版、岩波書店

田村（将）（2009:147）山本多助氏の「アサギはマウッカソ ポウス」について、ポウスは不明ながら〈maw-uk²³-ka-an ハマナスの実-とる-（染める）こと-私たち=ハマナスの実をとってアサギ asangi, asanki〔紫色〕にする〉を指しているのではないか。アイヌ語のアサギ色 asangi, asanki は日本語の紫色を指すこと、知里（1976:84）の「ひろく染料（紫・黒）に用いた」と符合することになる。

《民具（主に莫蔭）以外に衣服は染めたのか》

赤，黒，特別な黄に染めたオヒョウを民具の莫蔭に用いて文様としたアイヌの人々は，衣服にも同様に染めた糸を織り込んで作っていたのか。衣服〔厚司（樹皮衣，及び草皮衣を含む）と総称する〕を染めた記録は，3.1.1 の『夷諺俗話』，3.1.3『天塩日誌』，3.1.4『再航蝦夷日誌』，3.2.7『アイヌの足跡』そして，上村の Y 氏への聞き取りがあるが，資料として残されたものは少ない。樹皮衣，草皮衣の資料は綿布，綿糸が装飾として使用された資料が多い。他の色系で縦縞に織り込まれた資料は木綿糸が多い。図録にもオヒョウらしき黒糸が織り込まれた資料もある。図3の資料は数少ないオヒョウを染めた糸を織り込んでいると思われる資料である。

図3 樹皮衣 北海道大学植物園 No.88,1879 年収蔵²⁴



対雁由来（サハリンから強制移住された地）とされる資料である。この樹皮衣は黒く縞が織り込まれている。詳細な説明はないが，胴部の帯の位置，背部などに黒色がにじみとなっている。このにじみは汗や湿気などによるものか定かではないが，これはオヒョウを黒染めした糸が織り込んであり，色が定着しなかったために，にじみとなったものと考えられる。色が定着しないのは媒染が不十分で

²³ ハマナスの実をとる『千歳方言辞典:368,58』

²⁴ アイヌ民族文化推進・研究推進機構編（2015:335）『平成 27 年度アイヌ工芸品展 木と生きる－アイヌのくらしと木の造形』，同図録 p.337 も縞柄だが汚れとみる。児玉コレクション。

あったことが原因と考えられる。このように、にじみの入った資料は他の図録では見られない。

《考察を総括して》

本論はサハリンの衣服に特徴的な赤い装飾から本論は出発した。交易で入手する以前の赤い色はどのように得たのかの希求を目的とした。

植物の樹皮、内皮、真皮などを使用し、熱を加える、灰汁を用いる、鉄分のある沼に浸けることを繰り返すなどして、目指す色を求めた。赤色を得るためには、ハンノキ、イチイ（オンコ）まれにカシワ、黒色を得るためには、カシワ、クルミ、カツラ、アオダモ、アカヤナギなど、黄色は黄蘗によって得た。果実は種の特定には至らないものの赤色、黒色を染め、また花でも染めを行っていた。

植物染料（草木染）で染めを行い、衣服、莫座に代表される民具そして文身も植物で行ったことも判明した。染色については、サハリンでは果実が多用された。北海道では樹皮が多くを占めている。

本稿で「アサギはアイヌ語のアサング *asangi*, *asanki* で、日本語の紫色を指す」のではないかとする推論を導くことができた。

上村（上掲）が聞き取りをした Y 氏は明治 15（1882）年生まれで亡母の染色を子どもの頃から見ていたとのことである。ガンコウランについて更科・更科（1976:20）は「近年になってこれを染料にしたとはきかない」と記している。日本が大きな変革を迎えた 1868 年以降数年の間をおかずに既に綿布、綿糸も容易に入手できるようになったことと無縁ではないと思われる。

【参考文献等】

アイヌ文化振興・研究推進機構編（2015）『平成 27 年度アイヌ工芸品展 木と生きる－アイヌのくらしと木の造形』、アイヌ文化振興・研究推進機構

上村六郎（1979,初出 1943）『民族と染色文化』上村六郎染色著作集 一』、思文閣出版

大貫恵美子・坂口諒訳（2021）『樺太アイヌ民族誌 その生活と世界観』

大橋広好・門田裕一・木原浩・邑田仁・米倉浩司編（2016）『改訂新版 日本の野生植物 3』、平凡社

大橋広好・門田裕一・木原浩・邑田仁・米倉浩司編（2017）『改訂新版 日本の野生植物 4』、平凡社

岡山理科大学 生物地球学部 生物地球学科 <http://had0.big.ous.ac.jp/index.html>

串原正峯（右仲）（1792）『夷諺俗話』

a) 国立公文書館デジタルアーカイブ

<https://www.digital.archives.go.jp/DAS/meta/listPhoto?LANG=default&ID=F100000000000002068&ID=&TYPE=>

- b) 東京大学学術資産等アーカイブズポータル

<https://da.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/portal/assets/6d64cb64-2d60-6a9f-3775-1964d3735ca7>

窪田子蔵 (1969)「協和私役」, 高倉新一郎編『日本庶民生活史料集成 第4巻』三一書房

河野広道 (1971)「アイヌの織物染色法」, 河野広道著作集刊行会編『北方文化論 河野広道著作集 I』, 北海道出版企画センター

齋藤玲子 (1992)「北方地域における植物性染料, 特にハンノキの利用と信仰について」『北海道立北方民族博物館研究紀要』1巻

更科源蔵 (1968)『歴史と民族 アイヌ』, 社会思想社

更科源蔵・更科光 (1976)『コタン生物記 I 樹木・雑草編』, 法政大学出版局

市立函館博物館デジタルアーカイブ <https://hakohaku-archives.c.fun.ac.jp/records/701259>

染色と生活社編 (1981),『月刊染色 α(5)』, 染色と生活社

高橋寛光 (清左衛門) (1790)『瓦刺弗吐島雑記』,

- a) 国立公文書館デジタルアーカイブ,「瓦刺弗吐島雑記」『文鳳堂雑纂二六 瓦刺弗吐島雑記』

<https://www.digital.archives.go.jp/DAS/meta/listPhoto?LANG=default&ID=F1000000000000038324&ID=M1000000000000079667&TYPE=>

- b) 新日本古典籍総合データベース 『唐太雑記 (瓦刺弗吐島雑記 手島惟敏写本)』

<https://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/100250858/viewer/1>

- c) 国立国会図書館デジタルコレクション「瓦刺弗吐島雑記」『文鳳堂雑纂二六 瓦刺弗吐島雑記』 <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/25>

田村すゞ子 (1974)「アイヌ語沙流方言における動詞接尾辞-no および-nu について」『言語研究第65号』, 日本言語学会

田村将人 (2009)「山本多助氏のノートに含まれるアイヌ語樺太方言語彙」, 津曲敏郎編『サハリンの言語世界: 北大文学研究科公開シンポジウム報告集[17]』, 北海道大学大学院文学研究科

知里真志保 (1973)「アイヌ語の植物名に就いて」,『知里真志保著作集第3巻』, 平凡社

知里真志保 (1976)『知里真志保著作集 別巻 I 分類アイヌ語辞典 植物編・動物編』平凡社

知里真志保・山本祐弘 (1979)「第一章コタンの生活」, 山本祐弘篇『樺太自然民俗の生活』, 相模書房

東北福祉大学芹沢銈介美術工芸館（1990）『アイヌ文化展図録』，東北福祉大学芹沢銈介美術工芸館
中川裕（1995）『アイヌ語千歳方言辞典』，草風館

西鶴定嘉（1974,初出 1942）『樺太アイヌ』，みやま書房

服部四郎編（1964）『アイヌ語方言辞典』，岩波書店

バチラー，ジョン（1925）『アイヌ人とその説話』，富貴堂書房

国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/pid/936778/1/1>

バチラー，ジョン（1938）『アイヌ・英・和辞典』第4版，岩波書店

福井貞子（2004）『ものと人間の文化史 123・染織』，法政大学出版局

伏見冲敬編（1977）『角川書道辞典』，角川書店

北海道立近代美術館・宮城県美術館・アイヌ民族文化財団編（2019）『アイヌの美しき手仕事 柳宗悦と芹沢銈介のコレクションから』，アイヌ民族文化財団

北海道開拓記念館編（1973）『民族調査報告書－資料編Ⅱ－北海道開拓記念館調査報告第5号』，北海道開拓記念館

北海道開拓記念館編（1975）『民族調査報告書－資料編Ⅲ－北海道開拓記念館調査報告第8号』，北海道開拓記念館

前田雨城（1977）『新装版 日本古代の色彩と染』，河出書房新社

前田夏蔭・前田夏繁編（1865完成）『蝦夷志料』北蝦夷部交易2 蔬菜・土産・菜蔬・草木，内閣文庫，
国立公文書館デジタルアーカイブ

<https://www.digital.archives.go.jp/DAS/meta/listPhoto?LANG=default&ID=F10000000000000000000002146&ID=&TYPE=>

松浦武四郎「再航蝦夷日誌」，吉田武三校註（1971）『三航蝦夷日誌 下巻』吉川弘文館

松浦武四郎（1999）「再航蝦夷日誌」，松浦武四郎，秋葉實翻刻・編『校訂 蝦夷日誌』，北海道出版企画センター

松浦武四郎（1977）「天塩日誌」，『松浦武四郎紀行集（下）』富山房

a) 国立公文書館デジタルアーカイブ

<https://www.digital.archives.go.jp/DAS/meta/listPhoto?LANG=default&ID=F10000000000000000000001761&ID=M100000000000000000000076260&TYPE=>

b) 新日本古典籍総合データベース <https://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/100347387/viewer/1>

c) 国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/pid/2535732/1/1>

- 松浦武四郎（1977）「北蝦夷餘誌」、『松浦武四郎紀行集（下）』，富山房
- 松浦武四郎（1984）「東蝦夷日誌」松浦武四郎，吉田常吉編『新版 蝦夷日誌 上 東蝦夷日誌』，時事通信社
- 松前志摩守徳広（1937,初出 1863）福井久蔵校訂，『蝦夷嶋奇観補註（秘蹟大名文庫）』，厚生閣
- 国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/pid/1074538/1/3>
- 満岡伸一（2003）『アイヌの足跡』，アイヌ民族博物館
- 宮部金吾・三宅勉（1907）『樺太植物調査概報』，樺太民政署
- 国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/pid/832364/1/1>
- 宮部金吾・三宅勉（1915）『樺太植物誌』，樺太廳
- 山川シマ（1989）「山川シマさん」『ふるさとの語り部・第三号』，帯広百年記念館
- 山崎青樹（1981）「草木染めの媒染料②」，『月刊染色α(5)』，染色と生活社
- 山崎青樹（2014）『草木染 日本の縞』，美術出版社
- 山崎和樹（2003）「藍の生葉染に挑戦」，日本放送協会・日本出版放送協会編『NHK 趣味悠々 自然の色を楽しむやさしい草木染』，日本出版放送協会
- 山本祐弘（1970）『樺太アイヌ 住居と民具』，相模書房
- 稚内市北方植物園 <https://wakkanaihoppo.jimdofree.com/花事典/ツツジ科/>
- 渡辺仁（1951）「沙流アイヌにおける天然資源の利用」，日本民族學協會編『季刊民族學研究』第 16 卷第 3-4 号，日本民族學協會

（さとう まさこ）

《資料》

表1 染材と色，方法（出典の表記：KHは河野広道，KJは河野常吉で河野（1971）の記載による）

① サハリンアイヌ

出典	色	名	方法	その他特記事項
再航蝦夷日誌		チクイラ キライチマ→キライヅマ	口中にて嚙む	水獣の毛を染める
北蝦夷餘誌	黒	樺皮を焼いた油煙		矢
北蝦夷餘誌	赤	シュマヘー（石）		矢
KH多蘭泊	黒	フレップの皮(コケの実)	煎じる	
KH多蘭泊	赤	ハンノキの皮	煎じる	
知里1976 白浦・真岡	紫，黒	ガンコオラン(フラシノ)		
山本1970	黒	ガンコウランの実	嚙む	
山本1970	赤	ハンノキの皮	煮る	
山本1970	赤	コケモモの実		
知里・山本1979		ガンコウラン		
知里・山本1979		フレップの実		
知里・山本1979		ハンノキの樹皮	煎汁	
大貫2021	赤	ハンノキの樹皮 (より鮮やかにするため コケモモの実enonoka)	水 コケモモ液汁	
大貫2021	黒	ガンコウランの実kurasno	液汁	
大貫2021	黄	黄蘗の外皮	液汁	
西鶴	黒	ガンコウランの実		
西鶴	濃い紅	フレップ		
西鶴	薄紅	ハンノキ		
T.H.翁	黒	コケモモ（干）	水または湯	
T.H.翁	緑	クロウスゴの実		
U.N.纏	赤	ハンノキの皮	鍋で炊く	
U.N.纏	黒	オコマ？の木の皮		

② 北海道アイヌ

出典	色	名	方法	その他特記事項
夷語俗話	紫	フラシノ(ハマナシ)の実	口中にて噛む	
天塩日誌	赤	ラルマニ(イチイ、オンコ)	煮る	
天塩日誌	鼠		沼に浸す	
天塩日誌	黄茶	赤楊の皮	煮る	
天塩日誌	紫	ガンコウランの実		
天塩日誌	藍	シエイキナ		
東蝦夷日誌		ガンコウランの実		
協和私役		カシワの皮		
道庁調査1922	黒褐色	カシワ又は赤楊の皮	熱湯を注ぐ	後微温湯に鉄分を入れた液に移し、1週間浸ける
バチェラー	黒	カシワの皮	煎り立てた汁に浸ける	鉄分を多量に含んだ谷地に1週間浸ける
KJ,平取付近	黒褐色	カシワ又はクルミの皮	煮る	数日間や地に浸ける
KJ,平取付近	柑黄赤	柳皮を赤楊の皮 ブーシニカッブ	煮る	柳皮を染める
KJ,平取付近	淡紅色	シナノキの皮	灰汁で煮る	
KJ,元室蘭	赤	ヤチバハンノキ	生温かい湯を濯ぐ	
KJ,元室蘭	黒褐色	カシワの皮	2-3日煮て液汁を造る	後谷地水に浸して置く
KJ,N氏妻女		黄蘗など	煎じる	又谷地水などの浸す
KH,石狩付近	赤	オンコの内皮	煮る	
KH,石狩付近	黄赤	ハンノキの内皮	煮る	
KH,石狩付近	黒褐色	クルミの内皮	煎じる	後谷地水に浸ける
KH,十勝伏古	黒褐色	カシワ皮	煮る	
KH,十勝伏古	赤	ハンノキの真皮	煮る	
KH,小樽,浜益	黒褐色	クルミの皮	煮る	
KH,小樽,浜益	赤	ハンノキの皮	煮る	
KH,穂別付近	赤	カシワの木の皮	煮る	
KH,穂別付近	黒褐色	カシワの木の皮	煮る	ドブ水に入れる
KH,白老		カシワ		
KH,名寄			沼に浸ける	
KH,厚岸	黒	米百合(アイヌ名ハル)の花		
KH,厚岸	赤	ハマナシの花		
KH,標茶,塘路		タモの木とハンノキ		

出典	色	名	方法	その他特記事項
KH千歳	赤	ハンノキの内皮	煎じる	
KH千歳	黒	カツラの内皮	煎じる	後黒い谷地に一晚か二晩浸ける
満岡1924	黒	カシワの皮	渋を採る	野池水の中に浸す
満岡1924	薄黒色	—	—	野池水の中に浸す
満岡1924	赤	ハンノキの皮	熱湯を注ぐ	
渡辺1951	黒	カシワとクルミの樹皮	煎汁に1日ぐらい浸ける	湿地に泥土中に2-3日放置
渡辺1951	赤	ハンノキの樹皮	煎汁に1日ぐらい浸ける	湿地に泥土中に2-3日放置
渡辺1951	淡赤褐色	ハンノキの樹皮?	灰汁で数時間煮沸し、取り出して天日乾燥	
知里1976	黒	クルミ	樹皮	煎じる→鉄分の多い沼につける
更科1968	黒(含紫・紺)	クルミの樹皮や実の皮	煎汁で煮る	青粘土に埋める
〃 釧路白糠	黒(含紫・紺)	アオダモ	煎汁で煮る	
〃 静内農屋	黒(含紫・紺)	ケヤマウコギの実		
〃 新冠滑若 十勝音更	黒(含紫・紺)		鉄分のある湿地に入れる	
〃	赤(含紅・茶)	ハンノキの皮	煎汁	
〃 日高	赤(含紅・茶)	ハルニレの真皮		
〃	黄	黄蘗の真皮	煎汁	
更科/更科	赤	イチイ(オンコ)の木質と芯部		ハンノキよりも温かみのある大人しい色調になる
更科/更科	赤・赤褐色	ケヤマハンノキ	煎汁	
山川燿	黒	クルミの皮	煎じる	
山川燿	赤	ハンノキの皮		
上村Y氏	赤	ケネ(ハンノキ)皮を粉にして袋に入れて煮出す	媒染剤は用ひない	
上村Y氏	黒	クルミの樹皮や実の皮	沼地に入れる 「かなくそ」の水の中に入れる	
上村Y氏	黄	シコロ黄蘗の皮		アツシには用いない、キナを中心にのみ使用する

《参考》

表2 染材と媒染剤：本稿で取り上げた染め材の主な染材と媒染剤で得られる色

① 山崎青樹（2014:159-201,初出 1980）『草木染 日本の縞』，美術出版社による

染材	用いる部位	媒染					
		なし	アルミ	アルカリ	銅	鉄	その他
イチイ (オンコ)	幹 (高温で)		赤みのある 肌色		柿色		
	幹				赤褐色	紫	
	赤い心材のみ (高温で)		茶味の赤色				
黄蘗	内皮	黄色	なお良い			靨色	
	内皮+緑葉	いくらか 緑味がつく				海松色	
ズミ	樹皮，葉		黄色	赤茶	褐色	褐色から海松茶	
クルミ (オニグルミ)	果皮，緑葉，樹皮 全て青いうちに用いる		黄茶	赤茶	茶色	黒茶	
ハンノキ	樹皮，果，葉		黄茶		黒みの金茶	緑味の鼠	
	幹			赤茶		紫味の鼠	
ヤマハンノキ	果実，樹皮，葉			肌色		緑味の鼠	錫で黄色 クロムで金茶， 鉄とアルカリの併用で濃茶
カシワ	樹皮，緑葉			茶色	茶色	黒茶 (数度重ねる)	錫で茶色
ハマナス	根		赤茶	赤茶	褐色	紫褐色	

② 上村六郎（1979:427,初出 1943）「民族と染色文化」『上村六郎染色著作集 一』，思文閣出版による

染材	用いる部位	媒染				
		なし	アルカリ	銅	鉄	その他
イチイ (オンコ)	内皮	摺り染めで 黄橙色				
	内皮		灰汁 黄赤の緋ではなく， 紅味の濃い赤	赤褐色	紫	

Vegetable Dyes of Ainu: Clothes and Folk implements

– Materials for dyeing and Mordant –

SATO Masako

Summary:

The main characteristics of Ainu garments have been discussed in a number of papers. The Ainu people made their own garments: Bark clothes garments and Grass fiber clothes garments. Some of the materials for Bark clothes garments and Grass fiber clothes garments are cotton cloth and cotton threads used for decoration. The garments worn in Sakhalin with red decorations are eye-catching. These are not found in materials produced by the Ainu of Hokkaido. The Ainu dyed the bark fiber Japanese elm red or black, and used it to make patterns on rush mats made of Bulrush and other materials. However, there are many unknown points.

The purpose of this paper is to approach the differences in coloring and dyeing between the Hokkaido Ainu and the Sakhalin Ainu by exploring the materials and methods used for coloring.